

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 吉村 透

論 文 題 目

Clinical significance of gastrointestinal patency evaluation by using patency capsule in Crohn's disease

(クローン病におけるパテンシーカプセルを用いた消化管開通性評価の臨床的意義)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

柳野 正人 

名古屋大学教授

委員

中村 栄男 

名古屋大学教授

委員

小寺 泰弘 

名古屋大学教授

指導教授

徳 藤 秀実 

論文審査の結果の要旨

本研究ではパテンシーカプセル (PC) を行ったクローン病患者データを後ろ向きに解析し、PC による消化管開通性評価の精度、消化管開通性が臨床転帰に与える影響について検討した。PC の小腸狭窄病変を検出する感度、特異度、陽性的中率、陰性的中率はそれぞれ 91.7%、98.8%、98.9%、91.7%であった。PC で消化管開通性を認めた群と認めなかった群を比較検討すると、2年後の累積非入院率はそれぞれ 88.0%、53.3%、累積非手術率は 95.2%、60.0%と有意差を認めた。これらの結果、PC にて開通性を認めなかった症例では、狭窄性病変を有する可能性が高く、その後の入院率・手術率も有意に高いことが明らかになった。

本研究に対して、以下の点を議論した。

1. 本研究では生物学的製剤の使用と消化管開通性の間に関連性は認めなかった。生物学的製剤の使用は病状を安定させ開通性が向上することが推測されるが、一方使用群はより病状が悪い患者が含まれ開通性が悪化している可能性が考えられる。
2. 臨床症状が安定している患者においても、狭窄を有したり、内視鏡的活動性が残存する症例が想定よりも多く存在した。臨床症状が安定している患者に対しても定期的に PC を行いフォローアップすることが必要であると思われる。
3. クローン病患者に対してカプセル内視鏡を使用する場合には原則 PC を行っている。臨床症状が落ち着いている患者には 3 年程度で入院しダブルバルーン内視鏡検査を行っていたが、PC の導入により外来でカプセル内視鏡検査が可能になり、1、2年に一度検査を行っている。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	吉村 透
試験担当者	主査	柳野 正人	中野 敏	小寺 弘
	指導教授	後藤 秀寛		
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生物学的製剤を使用は消化管開通性に影響するか。 2. 臨床症状が落ち着いていても狭窄例は多いのか。 3. 現在の実臨床における使用状況について。 <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、消化器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				